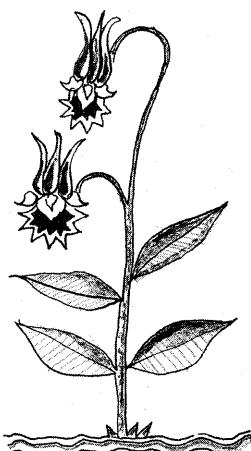


特集へ生まれる

「とばと生命と人生と

、生まれながらに、

原口 庄輔



「生まれる」という表現は実に面白い性質をもつてゐる。英語では bear (生む) の受け身形を用ひて、be born といふといふなりとは、かつて英語の授業で習つた。「(子を) 生む」といふのは、女性の特権であり、主語には女性しかなければならない。したがつて、John bore twins. (ジョンは双子を生んだ) というのを耳にしたとすると、「そんな馬鹿な」とか、「Joan (女性の名) の聞き間違いではないか」などと思はねである。

英語では、女性が子を生むときには、bear を用ひ、男性が子をもうけるときには、beget を用いて区別をする。事情は日本語でも似ており、「子を生む」のは女性であり、男性は「子を生む」ことはできないので、やゝやこしい「子をもうける」などといふのが別の表現を用ひる。ところが、ある英和辞書の beget の項を見ていたら、Abraham begat Isaac. (アブラハム、イサクを生めり) あるのを見て驚いた。

た。他の聖書はどうかと思い、手元にある聖書を一冊ほどもいて見たが、あいにく、文語の聖書はない。一冊は「アブラハムはイサクの父であった」となつており、もう一冊は、「アブラハムにイサクが生まれた」となつている。聖書によつて、訳文に違はあるが、「アブラハムがイサクを生んだ」式の訳は他にはあまりなさそうであり、例の英和辞書の訳文も改めた方が良さそうである。

日本語の「生まれる」は自発の意味の「あれれる(are-ru)」が「生む(um-)」に付加されて導きだされたものである。人間の一生は、生・育・死からなっており、それらはほぼ次の(1)に示すよくな関係になつてゐる。つまり、「生む」に対応する「生まれる」は自発であるのに對し、「死ぬ」に対応する「死なれる」は被害の受け身である。ところが、「育(うぶすな)」に對応する「育たれる」とは通例は言わない。しかし、例えば文脈上の理由で、「(犬が大きくなつたないように酒を飲ませたのに、大きく)育あつたれてしまい、弱つた」のような言い方をすれば、それは被害の受け身の解釈になる。

(1)

生む——生まれる（自発）

2

育てられる（可能・受け身）——育てる——育つ——育たれる？？

•

死ぬ——死なれる（被害の受け身）

一方、他動詞の「育てる」の場合、「られる」がついて「育てられる」となると、可能もしくは受け身の意味になる。このように、日本語の「(r) are-ru」は付加されるものにより、自発・可能・(被害の)受け身のいずれかに限られてくる。人の一生の過程の三つの相において、「生む」「育てる」「死ぬ」のいずれに付くかによって、意味が異なるなどいう」と百体、興味深いものがある。

思うに「生まれる」というのは、誠に不思議なことであり、偉大なものや良きものは、全て感動や愛から生まれる。もちろん、感動や愛がなくても「生まれる」ものはあるが、それらは、概してありきたりで、つまらなく、取るに足らないものでしかない。何かに感動して、素晴らしい芸術作品が作り出される一方、ショーバイツアーやマザー・テレサの偉業は、大きな愛に立脚している。

とすると、何か素晴らしいものを生み出すためには、豊かな感動する心を養つておくべきであり、広く大きな愛の心が大切であるということになる。ところが、現在の家庭教育や学校教育で、最も軽んじられているのは、感動するみずみずしい心を育むこと、広く豊かな愛の心を育むことのようである。その結果、子供は無感動・無気力になり、残忍になり、いじめを平氣とするようになっている。最も大切なものを慈しみ育むことを怠つて、素晴らしい世の中を築くことは望むべくもない。

人間には、(2)に示すように、貴重な宝が三つ生まれながらに備わっている。

- (2) a. 生命力
b. 言語(習得)能力
c. 才能

「生命力」は、あらゆる生命体に備わっている、想像を絶する大きな潜在能力であり、その偉大さは、野沢重雄氏がハイボニカによつて育てたトマトの巨木が示すとおりである。赤ん坊が言語を習得する能力も、人間に与えられた素晴らしい能力であり、人間にはまさに一を聞いて十を知る以上の言語能力が備わっている。また、人は必ず一つは優れた才能を持って生まれてきている。芸術・工芸・スポーツ・武道・学問・実業のいずれであれ、どれか一つは傑出しうる才能が潜在的に与えられている。惜しいことに、かなり多くの人々が、自分の才能に気がつかないため、それをのばすことなく一生を終える。これは、人としてこの世に生まれたのに、残念極まりないことである。

(2)にあげた三つの宝も、そのままでは十分ではなく、それらを強化し、大きく開花させたためには、「磨く」ことが不可欠である。いかに素晴らしい才能をもっていても、日頃の努力と鍛練によってそれを磨かなければ、実を結ぶことなく、埋もれたまま終わってしまう。言葉の力も、磨かなければ、人を感動させ、幸せにする言葉の達人にはなれない。生命力も磨かなければ、それを強化し、いかなる困難にも負けない生命力に溢れた人物にはなりえない。

愛と感動する心を大切にし、生まれながらの素晴らしい三つの宝を、工夫と努力によつて、磨きに磨いて、自ら光輝く宝となり、共に力を合わせて、我々の社会をこの世の理想郷に徐々に近づけてゆきたい、これが年来の夢である。